

第6学年国語科学習指導案

日時 平成16年11月19日(金)
児童 男7名 女2名 計9名
指導者 教諭 細川直宏

1 単元名
生き方や考え方を読み取ろう

2 教材名
「海の命」 立松 和平

3 教材について

本教材は、学習指導要領「C読むこと」の(1)のウ「登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むこと。」そして第5学年及び第6学年の「読むこと」に関する指導目標「目的に応じ、内容や趣旨を把握しながら読むことができるようにする」能力を育てることを主なねらいとしたものである。

本教材には、自然を舞台に、主人公の成長の姿が描かれている。一人の人間の成長には、周囲の人間の存在が大きく関わってくることで、また、主人公「太一」にとっての海やクエのように、人間の成長の過程には何らかの影響をもつ事物や事象があることを気づかせてくれる教材でもある。さらに、それらのことを自分に置き換えて考え、自分自身を見つめ直すきっかけとさせるのに適した面も持っている。

構成については、登場人物「太一」の少年期から始まり、青年、壮年になるまでの生涯が、6つの場面構成で描かれている。それぞれの場面を貫いて流れるものは、一人の少年の、父親たちが生きてきた海に寄せる熱い思いであり、父の死を乗り越え、父をしのぐ漁師を目指した成長の姿である。

4 児童の実態について

今までの国語学習の中で、さまざまな作品と出会ってきた。それぞれで身に付けてきた読みの力を生かして、あるいはそれらの作品と比べてこの作品を読んでいくことになる。

6年生の児童は、素直で明るい子どもたちが多く、発表場面でも臆することなく積極的に手を挙げ、自らの考えや思いを積極的に述べることのできる児童もいる。その反面、自分の考えや読み取った内容をまとめることを苦手としたり、また考えや読み取りに自信が持たずに発表をひかえてしまったりする児童もいる。学級全体としては、人物の言動に注意し、それらが互いにどのように影響し合っているのかについて思考をめぐらしたり、表現の細部にまで注意して読み、主題に迫る読みや主題について考えたりする事を、あまり得意としてはいない。

それ故この単元では、今の自分が多くの人々の支えによって生かされていることや、自分が逆に多くの人々の支えになっていることに気づかせ、今の自分を肯定し自信をもたせたいと考える。そうした中で、学級の中で互いのどんな意見にも真剣に耳を傾けさせ、自分の考えや読み取りがみんなに受け入れられるという安心感を持たせたい。主題に迫る読みや生きることの意味について構成や細部の表現に注意しながら思考をめぐらす力は、学級全体のあたたかな風土によってこそ作られると考えるからである。

5 指導にあたって

本単元をとおして、作者の考えと自分の考えと対比したり、自分自身の生き方について考えを深めたりさせたい。

「選択」させる発問をし、主人公「太一」の心情に影響を与えている各登場人物が、どんな言動をなしているかをきちんととらえさせたい。また、海の中の描写や光の差し込む様子の表現から、自然の美しさに気づかせたい。

「統合」させる発問では、クエを追い求める太一の気持ちの強さを感じ取らせるために、まぼろしの魚、父をやぶった瀬の主に出会うことを、漢字一字で何と表されているか考えさせたり、この作品の中で大きく成長し変容した太一の姿について読み取らせたりしたい。

また、「類推」させる発問により、「海の命」とは何かを考えさせたり、中心人物「太一」の「命」に対する考え方と、自分の「命」に対する考え方を比較し、「命」に対する考え方を広げさせたりしたい。さらに、太一を取り巻く人物との関係から、人間関係のすばらしさに気づかせたい。

学習活動では、サイドラインを活用したり、自分の考えや読み取りを一旦ノートに記述させたりし、発言する際の裏付けを与えたいと思う。また、必要に応じて学習形態を班毎にさせ、グループ内での考えや意見の交換をさせてから、全体での発表を促していきたい。また、人物の関係を図で表現させて人物の関係をとらえやすくし、主題読みへのステップとさせたい。

6 指導目標

登場人物の言葉や行動から、生き方や考え方を読み取り、「命」について考える。

〔国語への関心・意欲・態度〕

・自然を舞台にたくましく成長する主人公の生き方に関心を持ち、「命」について意欲的に考え、自分自身を見つめ直すとする。

〔読むこと〕

・登場人物の生き方や考え方を、その言葉や行動から読み取る。
・自分の考えを広げるために、同じ作者のシリーズや「命」というテーマで読む。

〔話すこと・聞くこと〕

・命や自分の生き方について考えを深めるため、自分の考えを話したり友だちの考えを聞いたりする。

〔書くこと〕

・命についての自分の考えを、経験や本で読んだことを事例として入れながら、組み立てを考えて書く。

〔言語事項〕

・「興奮」「奮う」など複数の読み方に気をつけて、漢字を読んだり書いたりする。

単元の評価規準

〔国語への関心・意欲・態度〕

・自然を舞台にたくましく成長する主人公の生き方に関心を持ち、「命」について意欲的に考え、自分自身を見つめ直すとしている。

〔読む能力〕

・登場人物の生き方や考え方を、その言葉や行動から読み取っている。
・自分の考えを広げるために、同じ作者のシリーズや「命」というテーマで読んでいる。

〔話す能力・聞く能力〕

・命や自分の生き方について考えを深めるため、自分の考えを話したり友だちの考えを聞いたりしている。

〔書く能力〕

・命についての自分の考えを、経験や本で読んだことを事例として入れながら、組み立てを考えて書いている。

〔言語についての知識・理解・技能〕

・「興奮」「奮う」など複数の読み方に気をつけて、漢字を読んだり書いたりしている。

7 指導計画と評価規準 (8時間)

段階	学 習 活 動	評 価 規 準	時間
つ か む	全文を通読し、初発の感想をまとめる。 ・ 題名が表すものに気をつけながら全文を読み、感想を書く。	〔国語への関心・意欲・態度〕 ・ 教材文を読んで、主人公の生き方や考え方に 関心をもち、意欲的に読み進めようとしている。 〔言語についての知識・理解・技能〕 ・ 「興奮」「奮う」など複数の読み方に気をつけ て、漢字を読んだり書いたりしている。	1
	・ 感想をもとに「海の命」を読み味わうための学習計画を 立て、学習課題を作る。	〔読む能力〕 ・ 感想をもとに学習課題を立てたりや学習計画の 立案をしったりしている。	1
よ み と る	各自が作った学習課題を手がかりに、個人やグループ、 全体で「海の命」を読み深める。 ・ 第1場面 太一を海にひきつけたものはなんだったのだろうか。	〔読む能力〕 ・ 海に対する太一の強いあこがれや、村一番のもぐり 漁師であった父に対する尊敬の気持ちを読み取 っている。	1
	・ 第2、3場面 「千びきにーびきでいいんだ。千びきにーびきをつ れば、ずっとこの海で生きていけるよ。」という与吉 じいさの言葉は何を意味しているのだろうか。	〔読む能力〕 ・ 与吉じいさに弟子入りした太一の気持ちや、太一 の成長を喜ぶ与吉じいさの気持ちを読み取って いる。	1
	・ 第4場面、 母と太一の海に対する気持ちの違いについて考えてみ よう。	〔読む能力〕 ・ 母の心配をよそにたくましく成長する太一の姿を、 その少年の頃からの夢とつなげながら深く読み取 っている。	1
	・ 第5場面 太一がクエにもりを打たなかったのはなぜだろうか。	〔読む能力〕 ・ 太一が巨大なクエにもりを打たなかった気持ちを 深く読み取り、太一の成長について感想を話し合 っている。	1 本時
	・ 第6場面 なぜ太一は生がい誰にも話さなかったのだろうか。	〔読む能力〕 ・ 母親がおだやかで満ち足りた美しいおばあさん になったわけを考えながら、太一が生涯誰にも 話さなかったことについて、自分の意見を持っ ている。	1
か ん が え る	全文を読み返して「海の命」という題名が表してい るものについて考えを深める。 「海の命」という題名について考えたことを作文にま とめよう。	〔書く能力〕 ・ 「海の命」という題名や命についての自分の考え を、これまでの読み取ったこと、また経験や本 で読んだことを事例として入れながら、組み立 てを考えて書いている。	
い か す	作品の中に流れる「命」についての考え方を発表しあ い、自分を見つめさせる。 「海の命」が表しているものは何かを話し合おう。	〔話す能力・聞く能力〕 ・ 自分の考えを話したり友だちの考えを聞いたりし、 命や自分の生き方について考えを深めている。	1

8 本時の指導

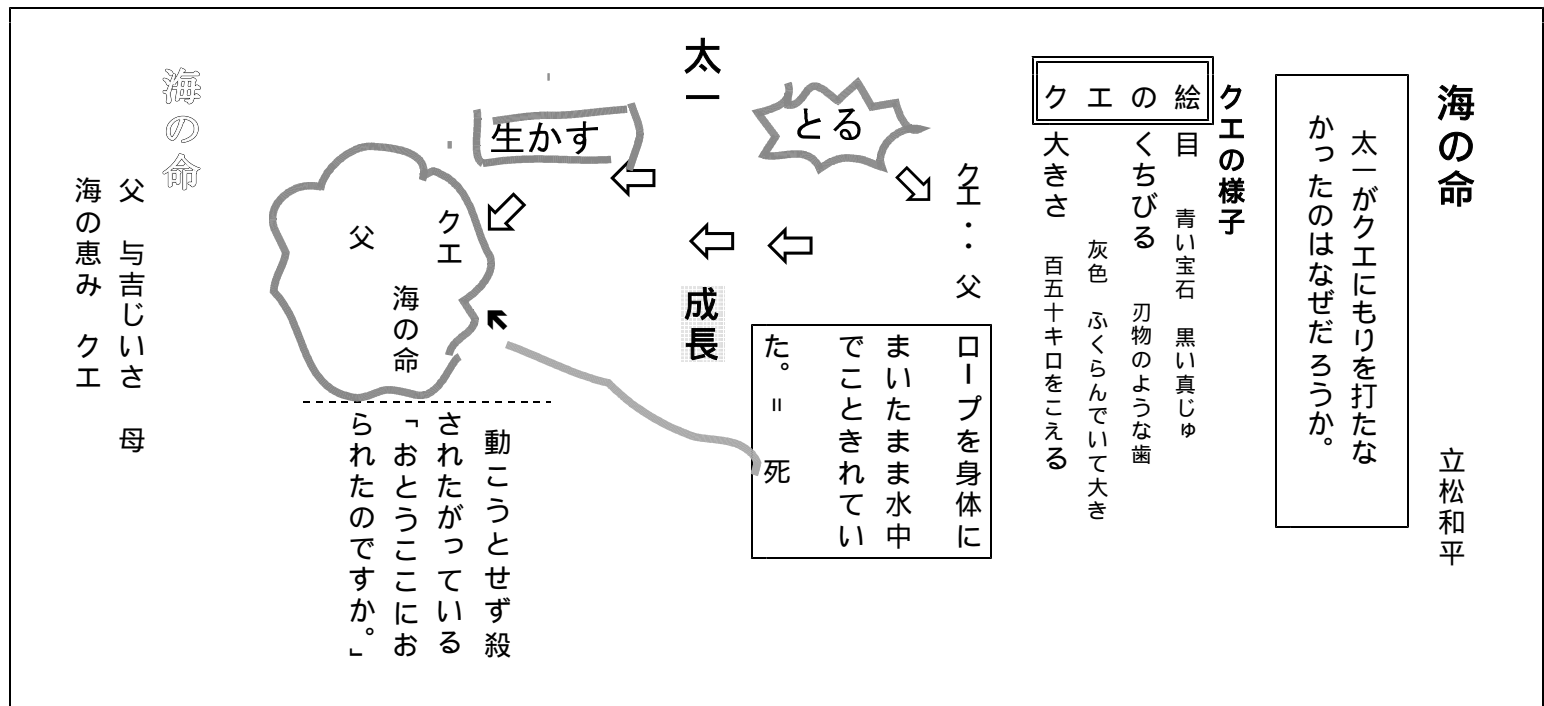
- (1) 目 標 太一が巨大なクエに抱いた気持ちを読み取り、もりを打たなかったわけを考える。
(2) 展 開

段階	学習活動および学習場面	主な発問	予想される児童の反応	指導上の留意点	評 価
つ か む	1 前時までの学習内 容を確認する。	・ 太一と母親の気持ち の違いはどんなところ でしたか。	・ 太一は「何としても クエを捕りたい。」 と思っているし、母 は、息子が父親と同 じ運命をたどること を恐れている。	・ 前の時間をま とめた掲示を 利用する。	
	2 学習課題を確認す る。	太一がクエにもりを打た なかったのはなぜだろ うか。	・ 音読	・ クエの様子が分 かるところに気 をつけながら読 ませたい。	
5 分	3 学習範囲を音読す る。(P 1 4 L 3 ~ P 1 9 L 3)				
	4 学習範囲を読み深めて いく。				

ふかめる	<p>出会うの場面を読み深める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> クエはどんな魚ですか (選択) まぼろしの魚、父をやぶった瀬の主に出会うことを、漢字一字で教科書に何と表されていますか。(統合) もどってきたとき、瀬の主はどんな様子でしたか。(選択) 目については「おだやかな目」以外にどんな表現で書いてありましたか。(選択) 	<ul style="list-style-type: none"> 目 青い宝石 ひとみ 黒い真じゆ くちびる 刃物のような歯が並んでいる、灰色、ふくらんでいて大きい。 体重 百五十キロはゆうにこえている 夢 瀬の主は全く動こうとはせずに おだやかな目 大魚は自分に殺されたがっている ひとみは黒い真じゆ 青い宝石 	<ul style="list-style-type: none"> 分かるところにサイドラインを引かせてから発表させる。 紙板書を使い、時間をかけないように進めたい。 出ない時は、探す範囲を限定する。 サイドラインを引かせてから発表させる。 太一には、クエがおとうを死に追いやった憎い相手としてだけでなく、「黒い真じゆ」「青い宝石」など、価値の高さに見えたのだということをとらえさせたい。 	
ふかめる	<p>葛藤の後に成長する瞬間を読み深める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「この魚をとらえなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだ」と思ったとき、太一はどんな表情になりましたか。(選択) 「こう思うことによつて、」の「こう思う」とは、どう思うことですか。(選択) 太一が巨大なクエを前にして泣きそうな気持ちになった時から、ふっとほほえみ口から銀のあぶくを出すまでに考えたのは、どんなことだろう。(類推) 	<ul style="list-style-type: none"> 泣きそうになりました。 「おとう、ここにおられたのですか。また、会いに来ますから。」 おとう、こんなところにいたのか。 おとう、とうとうおとうに追いついたぞ。 父をやぶったクエを捕らえなければ父を超えることはできない。 母を悲しませるようなことはしたくない。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書や紙板書を活用し、改行があることに留意させ、そこにしばしの時間の経過があることを意識させてから考えさせたい。 太一の胸にある物は単純なものではなく、様々な思いが渦巻いていることを示唆し、子どもなりの考えを引き出したい。 	<p>【評価規準】 太一が巨大なクエに抱いた気持ちを読み取り、もりを打たなかったわけを考えることができる。 【具体的評価規準】 A：太一が巨大なクエに抱いた気持ちを読み取り、もりを打たなかったわけについて自分の考えを深める。 B：友だちの意見を参考にしながら、もりを打たなかったわけについて自</p>
ふかめる	<p>学習課題を解決する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 太一がクエにもりを打たなかったのはなぜだろうか。(類推) 	<ul style="list-style-type: none"> クエがおとうだと思えたから。 大魚が海の命だと思えたから。 クエを打つと、殺せるかもしれないけど、もしかすると父と同じ運命をたどって母を悲しませることになってしまうかもしれないから。 大魚に与吉じいさや父、あるいは海の恵みなどたくさんのものを感じたから。 クエが海の守り神のように思えたから。 父を破ったクエの落ち着いた態度を見たとき、「千びきにーびきでいいんだ。」と言った与吉じいさの言葉の意味が分かったのかもしれない 	<ul style="list-style-type: none"> 発表の際の根拠や考えを深めるための手だてとさせるため、ノートに書かせる。 前の発問と意味的に重複する部分がかなりあり、同じような表現の発表が出てくることも考えられるが、それも許容し、話しやすい雰囲気を作りたい。 記述にはないが、母への思いに触れる子がいたならば、とても深い読みとしてみたい。 	<p>【指導を要する児童への手立て】友だちの発表を聞いて、一番いいなあと思った考えを発表してよ</p>

35分		・「海の命」とは何か、ノートに書いてみよう。(類推)	から。 ・父、与吉じいさ、海の生き物すべて、海の恵み、自分、母	いことを知らせる。 ・次時の学習への確実なステップとなるように、自分がそうだと考えたのはほとんど発表させたい。	分の考えを深める。 (発言・ノート)
まとめる 5分	5 学習範囲のまとめの音読をする。 (P15L8~P19L3) 6 次時の学習を確認する。	・次の時間は、第6場面の学習とまとめの感想を書いてもらいます。		・改行部分の間に気をつけさせ、学習したことを考えながら読ませたい。	

9 板書計画



10 座席表



〔発表〕
意欲的に自分の考えを発表する。
自信があることは進んで発表する。

〔読むこと〕
書かれていることを正しく読み取ることができる。
書かれていることを概ね読み取ることができる。